

# ダニエル書 - 第一百四十四回

## 最後の約束：主の日の前におけるエリヤの役割の解明

Jeff Pippenger

2024-03-16

旧約聖書の最後の約束は、主の大いなる恐るべき日の前に、エリヤが来るということである。

わたしのしもべモーセの律法を覚えよ。わたしがホレブで全イスラエルのために、掟と定めとともに彼に命じたものである。見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる。そうでなければ、わたしは来て呪いをもって地を打つ。マラキ書 4:4-5。

「主の大いなる恐るべき日」に先立って来るエリヤは、一人の使者であると同時に、その使者が宣べ伝えるメッセージに伴う運動でもある。したがって、遣わされるエリヤとは、エノクとエリヤが象徴するように、死を味わわない十四万四千人のことである。彼らは、まもなく施行される日曜法の時に、旗印として高く掲げられる者たちである。

終末のエリヤはバプテスマのヨハネによっても象徴されていたが、ヨハネは十四万四千人を表していたわけではない。彼が象徴していたのは、その運動に加わり、終末の使者のメッセージを受け入れる人々であり、その人々は、間もなく到来する日曜法から始まり、ミカエルが立ち上がり、教皇権が誰にも助けられずに終わりを迎えるときに終わる日曜法危機の時に、教皇権によって殺害される。

エリヤはカルメル山において示され、ヨハネはヘロデ王の宴会場において示されている。その二人の歴史的証人は、黙示録7章に示されている神の終わりの時の民の二つの集団を特定する。14万4千人と大群衆は、カルメル山とヘロデの誕生日の宴に対応している。これら二つの預言の筋は、黙示録17章の七つの頭に属する第八の頭の諸要素を慎重に見極めるための確かな拠り所を与え、さらに、聖書預言における第六の王国の最後の動きの中で、最後の大統領、すなわち七つのうちの第八となる大統領がどのように、そしてなぜ米国の大独裁者となるのかを明らかにするのに十分な預言的詳細を提供する。

日曜法制定時に、三者連合が成立する。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心靈主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けるとき、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

しかしこの説明には順序があり、その順序は靈感を受けた御言葉が扱っている主題である。それは「布告」の時に起こる出来事で、ある意味では単一の出来事だが、実際には非

常に綿密に配された一連の出来事である。「布告」においてアメリカ合衆国は聖書の預言における第六の王国であることをやめる。つまりそこで第七の王国が始まるが、第七の王国は自らの王国を獣に与えることに同意する。偽預言者が打ち負かされると、竜がその地位を占め、直ちに自らの王国の半分を獣に与える。

カルメル山にはバアルの預言者が四百五十人おり、また、サマリアでイゼベルの食卓で食事をしていた林の預言者が四百人いた。

それゆえ今、人を遣わして、全イスラエルをカルメル山に、またバアルの預言者四百五十人と、林の預言者四百人、すなわちイゼベルの食卓で食べる者たちを、私のもとに集めよ。列王記上 18:19。

エリヤは、カルメル山での対決を、真の神が誰かという問題だけでなく、真の預言者が誰かをめぐる論争でもあったと捉えている。

そこでエリヤは民に言った。「主の預言者として残っているのは、私ただひとりだ。しかし、バアルの預言者は四百五十人いる。」列王記上18章22節

天から下ってきた火がエリヤのいけにえを焼き尽くしたとき、彼は自らの手でバアルの預言者四百五十人を殺した。

エリヤは彼らに言った。「バアルの預言者たちを捕らえよ。ひとりも逃してはならない。」彼らは預言者たちを捕らえた。エリヤは彼らをキシオン川へ連れて下り、そこで彼らを殺した。列王記上18章40節

バアルは偽りの男神であり、なおサマリアの町でイゼベルとともにいて彼女の食卓で食事していた林の四百人の預言者は、女神アシュタロトの預言者であった。女神は、カルメル山でのエリヤによる預言者たちの虐殺を免れた。

山の上にいる人々は、目に見えない神の前に、恐怖と畏敬の念に打たれてひれ伏す。彼らは天から送られた、輝き、すべてを焼き尽くす火を直視することができない。自分たちの背信と罪のゆえに焼き尽くされてしまうのではないかと恐れる。彼らは一斉に叫び、その声は山いっばいに響き、下の平野にまで恐ろしいほどはっきりとこだます。「主こそ神である。主こそ神である。」ついにイスラエルは目を覚まし、欺きから解放された。彼らは自分の罪と、いかに大いに神を辱めてきたかを見た。彼らの怒りはバアルの預言者たちに向けられて燃え上がる。アハブとバアルの祭司たちは、戦慄の恐怖のうちに、エホバの力の驚くべき現れを目撃した。再び、人々に向けられたエリヤの命令の鋭い声が響く。「バアルの預言者たちを捕えよ。一人も逃してはならない。」民はエリヤの言葉に従う用意ができていた。彼らは自分たちを惑わした偽りの預言者たちを捕え、キシオン川へ連れて行った。そしてそこで、エリヤは自らの手でこの偶像礼拝の祭司たちを打ち殺した。レビュー・アンド・ヘラルド、1873年10月7日。

カルメル山は、アメリカ合衆国に間もなく到来する日曜日法を象徴している。その時、十四万四千人の旗印（エリヤによって象徴される）が掲げられる。そこでは、サマリアにいてイゼベルの食卓に与っている偽りのプロテスタントの角と対照的に、真のプロテスタントの角が明確に現れる。そこではまた、カルメル山に至るまで教会と国家の双方の角となっていた共和主義の角が、聖書の預言における第六の王国として終わりに至る。残るの

は、アハブと、その十部族の国、そしてサマリアに身を潜め、背教したプロテスタントと食事をしているイゼベルである。第六の王国は終わり、そして雨は量りなく降る。

ヘロデの誕生日の宴の席で、エリヤはバプテスマのヨハネによって象徴され、解放か死かを待ちながらローマの牢獄にいる。欺きの舞を演じるバアルの預言者たちはおらず、いるのはイゼベルの娘サロメだけだ。ヘロデとその廷臣たちはバビロンの酒に酔っている。彼の誕生日はまた日曜法を象徴しており、まもなく来る日曜法のずっと前、2001年9月11日に、すべての国々はバビロンの酒を飲み始めた。

これらのことの後、私は、天から降りてくるもう一人の天使を見た。その天使は大いなる権威を帯び、その栄光によって地は輝いた。彼は力強い大声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪魔たちの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。というのは、諸国の民はみな彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の豊かさによって富を得たからである。」黙示録 18:1-3

この三つの節は、ニューヨークの巨大な建造物、ツインタワーが神のひと触れによって打ち倒されたときに成就した。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ているのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！その時、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」Review and Herald、1906年7月5日。

間もなく到来する日曜法は、黙示録18章の第二の声によって表されており、アハブのカルメル山とヘロデの誕生日の宴を表している。ヘロデヤ（すなわちイゼベルでもある）は、イゼベルがカルメル山に不在であったのと同様に、ヘロデの酒に酔った宴には出席していない。日曜法に至るまで、彼女は、聖書の預言における第六の王国である地の獣の支配の象徴的な七十年のあいだ、忘れ去られてきた。イゼベルが1798年と1799年に致命的な傷を受けたとき、第六の王国（アメリカ合衆国）は、聖書の預言における第六の王国としての時代を開始した。第六の王国が終わると、彼女は戻ってきて自分の歌を歌い始め、地上のすべての国々と姦淫を行う。

彼女の姦淫とぶどう酒の歌は、2001年9月11日に予言的に始められたが、それは単なる準備の期間にすぎず、彼女が初めて王座に就いた538年に至る508年からの三十年間によって表されていたとおりである。第六の王国がエリヤの手によって打ち倒されることになる日曜法の時まで、彼女はサマリアに隠されている。その時点で、バプテスマのヨハネは彼

女の牢に囚われ、解放か死かのどちらかを待っている。

ヘロデと彼の貴族の友人たちはバビロンの酒に酔いしれていた。そこへヘロディア（イゼベル）の娘サロメがきわめて誘惑的な舞を演じ、ヘロデは好色で近親相姦的な欲望を露わにした。彼は継娘たちの性的な誘いにすっかり心を奪われ、彼女に王国の半分までを与える申し出た。

やがて都合のよい日が来た。ヘロデは自分の誕生日に、貴族や軍の高官、そしてガリラヤの主だった人々のために宴を催した。そこへ、そのヘロデヤの娘が入って来て踊り、ヘロデと同席していた者たちを喜ばせたので、王はその少女に言った、「望むものを何でも私に求めなさい。与えよう」。そして彼女に誓って言った、「たとえ私の国の半分でも、あなたが私に求めるものは何でも与えよう」。彼女は出て行って母に、「何を願いましょう」と言った。母は「バプテスマのヨハネの首を」と言った。彼女はすぐさま急いで王のもとに行き、「ただちに大皿に載せて、バプテスマのヨハネの首を私にお与えください」と願い出た。王は非常に悲しんだが、誓いを立てていたことと、同席の者たちの手前、彼女を退けようとはしなかった。そこで王はただちに死刑執行人を遣わして、彼の首を持って来るよう命じた。執行人は出て行き、獄中で彼の首をはね、大皿に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母に渡した。マルコによる福音書 6:21-28。

黙示録第十八章の最初の声は2001年9月11日に響き、第二の声はまもなく来る日曜法の時に響く。ヨハネ第六章に表されている歴史において、2001年の最初の声は、キリストが弟子たちに、自分の肉を食べ自分の血を飲まなければならない、と告げる声であった。なぜなら、彼こそが天からのまことのパンであったからである。その期間はガリラヤで始まり、ヨハネ第六章第六十六節において、彼から離れ去った弟子たちのふるい分けで終わった。その歴史は、食に関する試みをもってガリラヤで始まり、獣の刻印の施行で終わった。これは、教皇の名の数、すなわち六・六・六によって類型化されている。ガリラヤは「転換点」を意味し、2001年9月11日は預言的な「転換点」（ガリラヤ）であり、ヘロデの誕生日はガリラヤの指導者たちと共にあった。黙示録第十八章の始まりの声も終わりの声も、いずれも転換点であるガリラヤによって表されている。

過去の歴史から学ぶべき教訓がある。これらに注意が喚起されるのは、神が今も昔と変わらぬ同じやり方で働いておられることを、すべての人が理解するためである。神の御手は、御業のうちに、また諸国民の間において、今も見て取ることができる。それは、エデンでアダムに福音が最初に宣べ伝えられて以来、ずっと変わらない。

国々の歴史や教会の歴史には、転機となる時期がある。神の摂理により、こうしたさまざまな危機が到来するときには、その時にふさわしい光が与えられる。それを受け入れるなら霊的な前進があり、拒むなら霊的な衰退と難破が後を追う。主はみことばのうちに、福音の積極的な働きが過去にどのように進められてきたか、また将来いかに進められるかを、サタンの諸勢力が最後の驚くべき動きをする最後の闘いに至るまで、明らかにしておられる。Bible Echo, 1895年8月26日。

2001年におけるガリラヤと、間もなく来る日曜法の時におけるガリラヤは、後の雨の光がいつ注がれるかを示している。2001年にはそれは制限された注ぎ出しであったが、第二の声においては量りなしに注がれる。これは、エリヤがバアルの預言者たちを殺した後に

起こった大いなる注ぎ出しによって表されており、それはヘロデの誕生日の宴で起こった。ヘロデの誕生日は、直前の王国の死に直ちに続く、聖書予言の第七の王国の誕生を指し示している。アメリカ合衆国は1798年に、第五の王国の死の時に支配を開始し、バアルの預言者たちの死において、第七の王国の誕生の日が来た。その第七の王国は、アハブの十部族から成る北の王国、および異教ローマの北方の十王国の代表であるヘロデによって表されている。

そして、あなたが獣の上に見た十本の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くすであろう。というのは、神がご自分の御心を成就させるために、それを彼らの心に入れ、彼らを一つ思いにし、神の言葉が成就するまで、彼らの王権を獣に渡すようにされたからである。あなたが見た女は、地の王たちを支配しているあの大きい都である。ヨハネの黙示録 17:16-18.

ヘロデはサロメに立てた誓いを果たし、ヨハネの首を与えることに同意した。彼の誓いは、王国の半分までを与えるという形で示されていた。国連の十人の王たちは、淫婦を憎んでいるにもかかわらず、自分たちの第七の王国を第八の頭、すなわち先の七つの頭に属する者に与えることに同意する。彼らは、世界的な国家が彼女の世界的な教会と結合することを前提とした王国に同意する。しかしその婚姻は英式の婚姻ではなくラテン式の婚姻である。というのも、彼らの婚姻は「女」が「王たちの上に」君臨することによって表されているからである。ラテン式の婚姻では、家族は男の姓ではなく女の姓を保持する。そしてこの二重の婚姻の名称は、預言的叙述における重要な要素である。

「王や支配者や総督らは、自らに反キリストの烙印を押し、聖徒-すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持つ者たち-と戦いを挑みに行く竜として表されている。」牧師たちへの証言、38.

次回の記事でこの研究を続けます。

ユダとエルサレムについて、アモツの子イザヤが見た言葉。終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く据えられ、丘々よりも高くそびえ、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う、「さあ、主の山に、ヤコブの神の家を上ろう。主はその道を私たちに教え、私たちはその道筋を歩もう。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るのだから。」……その日、七人の女が一人の男に取りすがって言う、「私たちは自分のパンを食べ、自分の衣を着ます。ただ、私たちのそしりを取り去るために、あなたの名で呼ばせてください。」その日、主の若枝は麗しく栄え、地の実りはイスラエルの逃れた者たちのためにすぐれて美しくなる。そして、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者は、皆、聖なる者と呼ばれる。すなわち、エルサレムで生きる者のうちに名を記されたすべての者である。主が、裁きの霊と焼き尽くす霊によって、シオンの娘たちの汚れを洗い去り、エルサレムの血をその中から清めるとき。イザヤ書 2:1-3、4:1-4.